

ゆきぎのみち

日本古神
道研究会

皇紀 二六六二年 六月 八日 横浜定例講演より

『教育を根本から問う』

教える事と形が
中心の近代教育

「教育」と言いますと、「教える事」と「育てる事」という二つの言葉が入っておりますが、現在の教育は大いに異なった形になってしまっています。教育というのは、教えることに意味があるのではない。育てることに意味があるのです。ですから、育たない限り教育をしたことにはならないのです。今の教育は、教えることが中心になっています。

本来は教育の前に、「養育」というものがある。赤ちゃんの時から養育するというものがある。どちらも育たなければ意味はないのです。養育にしても教育にしても育たなければ意味はない。ところが今の教育は、教えることですら形だけになっている。学校の先生は「教えました。文部科学省のこの時期にこれを教える」という要項に基づいて教えました。分からない人は塾に行つて下さい」となってしまう。

無責任時代
に育つ子供達

何気ないけれども、この一事を
持って今の世の中全部を見通すこ
とが出来たのです。どういふこと
かというと、専門家が全部自分のことを放棄してしまっているの
です。今の政治を見てもそうです。外務省が国家を代表して国際
的なものに当たらなければならぬのにそれが出来ないのです。

教育の面では学校の先生が出来ないものを学習塾でカバーし、
本来国家が行なうべき外交が出来ない部分を NGO などの民間団
体が補っているのです。学習塾が悪いとか NGO が悪いというこ
とではなく、こうした現象が時代の流れとして何を表しているか
を読み取ることが大切なのです。こうなると、国家の権威とい
うものは全然なくなります。

「教育」ということ自体を放棄し、「外交」を放棄し、国家は
政治ということも分からなくなって、目先のことだけを言ってい
ればいいという時代になってしまっている。そうではなくて日本
の国をどのように運営し、日本の将来というものを、確たる信念
を持って「このようにするのだ」と言う政治家が今はいない。み
んな無責任時代です。植木等さんが無責任と言っていました。が、
正に今、全体が無責任時代になっているのです。

会社においても取締役をいっぱい作っておいて、そして誰が責
任者なのか分からないような状態にしている。本当は社長さんが
総責任者です。すべての責任を長が負うのです。ところが取締役
会でこの分野は誰それのという形に、みんな分散してしまって、
一体誰が責任者なのか分からないような状態にできてしまっている。

こういう戦後教育をしてしまったのです。

理念なき 迎合社会

これは、現在の国家公務員にしても地方公務員にしても、一般的に言えることですけれども、特に国家公務員の場合は国家試験に受かっただけで、それぞれ自分はこの省にと自分が選んでいく。国家試験に受かって、自分はどこに入りたいかということで、面接を受ける。例えば、文部科学省に入ります。

ところが、そこでその人が何に向いているかという事は何にも考慮されないので。たまたまそこに欠員があるから「あなたはどこを担当しなさい」と言われて配属される。そういう事で配置された人が教科書担当になったりすると、昨年のように音楽の教科書から、日本の名曲である「荒城の月」を廃止するなどということとを平気でするのです。「やってもやらなくても月給は同じだし、食えればよい」という程度にしか考えていない。

やはり、日本の良さ、日本の名曲といわれるようなものは全部残しておいて、それにプラスして外国の良いものを入れようというならば良いけれども、日本の良いものを全部を放り出して、外国のものだけを入れようとか、最近の新しいもの、子供向きのものを取り入れようとか、世の中全体が迎合型になっている。国の方針がない。

それでは困るのです。あくまで指導する立場でなければいけないのです。日本の国はこれからこういう方向に向いていくから、こういう教育を皆さんは学んでください、という風にするならば

良いけれども、若者が今とても賑やかなものを好んでいます。あれは音楽ではない、リズムです。要するに体を動かすのに丁度良いものばかりをやっているのです。最近の若い人を見たってそうでしょう。歌ではなくてリズムです。音楽なんて程遠い。そういう方向になってしまっている。やはり唱歌であつてもいいものはいく、いいじゃないですか。祖父母、父母、子供、孫と歌い継がれていく、いいじゃないですか。

頼りない大人 ませてしまいう子供

その迎合型というのは全体に言えます。先生が生徒さんと同じような次に問題になった、葬式ごっこみたいなことをやっている。先生と生徒が一緒というのは違うでしょう。これはいわゆる「平等」と教えるからいけないのです。平等ということはあり得ない。特に先生と生徒、親と子、会社の経営者と従業員、絶対に平等であつてはいけません。親が子供の言う通りになってどうするのですか。やはりそういう区別ができていない。平等というのは違うのです。みな迎合型をやつて、学校の先生が生徒の機嫌をとる。親御さんが子供の機嫌をとる、そういう時代になってきてしまっているのです。

本来はそうではなくて、やはり叱るべき時には叱らなければいけない。「育てる」ということが大事なのです。育てるべき時に「よしよし」と言っていたのでは駄目なのです。今は大半の大人の方が乳離れ・子離れが出来ていない。大人のくせに子供っぽい部分がある。

そして、逆に子供のくせに大人っぽくなる。何故かと言うと、大人が頼りないからです。大人に叱ってもらわなければいけない、あるいは大人に甘えたいときに、大人が自分たち子供の世界に入ってきて甘えてくるから、自分たちと同じ目線になってくるから、子供の方は、大人が頼りないからと大人っぽくなるのです。大人が子供っぽくなる。今はそういう時代です。男性が女性化し、女性が男性化し、外国人が日本化し、日本人が外国化している。

そういう時代です。みんな「らしさ」が無くなっている。男らしさ、日本人らしさ、らしさがない。そういう曖昧な時代になってしまっている。何でもなく見えるけれども、全体の風潮がそうになってきている。だからこそ、男は男として、大人は大人として、先生は先生としてというものが大事になって来る。

自由の範囲は 責任を取れる範囲

自由とか平等というものを履き違えてしまって、先生は子供の機嫌をとれば良いと思ってしまうている。大いなる間違いです。教える方と学ぶ方とは、格段の違いがあるのです。ところが先生の方が、教育者としてのあるべき姿、先生らしさというものを失ってしまっている。ですからそこで育つ子供さんの方が迷ってしまうのです。

その上さらに平等とか自由だということ教えるから、「何を言っても自由なんだ」と、自由というものを「わがまま勝手」と取り違えてしまっている。先生が子供さんの目線に降りてしまふ。小さい赤ちゃんとか、幼稚園ぐらいまでの子供さんの時には、目線を降ろしてあげる必要があるけれども、やや成長してきたら、

少しづつ距離をおいてあげなければいけない。そういったことがわからない。

馬鹿の一つ覚えみたいに、「目線に降りてあげるといいよ」と言ったら、全部目線に降りてしまふ。小学校、中学校になっても目線に降りてしまふ。そして生徒と一緒に葬式ごっこをやったという。先生ご自身も、今の一般の大人の方も、「考える力」というのがないのです。これは残念なことです。

学び考える 力を育てる

大事なのは、「考える力」です。ところが、今の教育とか養育ということでは、教えられることを一方的に覚えるだけです。覚える勉強しにくい。これを知っていますか？と試験をして点数評価をする。いつどこで誰が何をしたかという歴史などはそういう典型的なものです。いつ、どこで、誰が何をやった、それが試験に出てくるのです。

知っているか知らないか、それで八十点をとったら合格、七十点だったら不合格と、一点差で合格・不合格を分けるというようなことをやっているわけです。同じ歴史を学ぶにしても、ただ誰がいつどこで何をやったというそういうことを学ぶのではなく、それが現代社会にどう影響しているのか。またそういう考え方をとった時、どういう人生を歩むことになるのか、そこから学ぶものを教えてもらわないと意味がないのです。

その人の生き様とか、その人の考え方からするとこうなるよ。それは現代社会に置き換えたらこうなるよという様な勉強なら良